日本薬史学会 編

『薬史学入門』

本書は，1954（昭和29）年に創立された日本薬史学会が，薬学教育モデルコアカリキュラムの動向にも注視しながら，全国の薬系大学で“薬史学の入門書”として広く活用されることを期待して編集した書籍で，“序章 薬学を過去から学ぶ”，“第1章 通史”，“第2章 薬学教育の歴史”，“第3章 薬剤師の歴史”，“第4章 製薬産業の歴史”，“第5章 薬事制度の歴史”および“各章課題の解説”と“付録”から構成されている．

序章では，薬学を過去から学ぶ意義や薬剤師の社会的役割の変遷，第1章では，日本と西欧における古代，中世，近世，近代の薬学の歴史，第2章では，黎明期（明治時代）から戦後，そして戦後から現在に至るまでの薬学教育の変遷，第3章では，漢方，売薬，医薬分業，薬局薬剤師，病院薬剤師の歴史，第4章では，製薬産業としての勃興，製薬産業と薬事制度，新薬の臨床開発の歴史，薬の流通と情報提供の歴史，人類に貢献した薬の開発史，第5章では，薬事制度，薬局・薬剤師制度，厚生労働省，保健医療制度の歴史が解説されている．

さらに本書では「薬学の歴史を通し社会に貢献した薬学の役割を学ぶ」，「どのような薬剤師になるべきか．薬剤師の使命・役割」「疾病に対する製薬産業の役割，企業の社会的役割」「薬事制度の変革の歴史を学ぶ」ことなどを目的とした課題とその回答例を示す，随所に理解を深めるための図表を挿入する，など読者の理解を深める工夫がなされていて便利である．さらに付録として，薬学史の主な参考書，くすり博物館・資料館一覧も示されており，本書で概説されている事物をキーワードとしてさらに学習を進める上での参考情報にも事欠かない．

過去の成功や過ち，繰り返される事象やそれらの因果関係を熟知することで，失敗を未然に防ぐことができ，さらには将来に備えて現在なすべきことを知ることができよう．未経験の事態に直面したときにも，その危機に対処する方法を案出することもできよう．また，現在の何故？という疑問にも，歴史が答えてくれるかもしれない．

コンパクトな書籍ではあるが，日本における薬学教育，薬剤師，製薬産業，薬事制度の成立と変遷の「歴史的背景」や国外との関わりを含めた「当時の社会情勢」が解説されており，薬学や製薬，薬剤師および薬事関連制度が過去に果たしてきた役割から現状を俯瞰するのに十分な内容である．例えば，薬系教員にとって，本書の第2章は，現在の薬学教育に至った背景を理解し，これからの薬学教育の在り方を考える上で，大いに参考になろう．

“薬学教育モデル・コア・カリキュラム令和4年度改訂版（案）”では，薬剤師が「豊かな人間性と医療人としての高い倫理観を備え，薬の専門家として医療安全を認識し，責任をもって患者，生活者の命と健康な生活を守り，医療と薬学の発展に寄与して社会に貢献できる」ようになることを目標として，薬剤師として求められる“10の基本的な資質・能力”を掲げている．これらのうち，“1. プロフェッショナリズム”，“2. 総合的に患者・生活者をみる姿勢”，“10. 社会における医療の役割の理解”については，それぞれ，「豊かな人間性と生命の尊厳に関する深い認識をもち，薬剤師としての人の健康の維持・増進に貢献する使命感と責任感，患者・生活者の権利を尊重して利益を守る倫理観を持ち，医薬品等による健康被害（薬害，医療事故，重篤な副作用等）を発生させることがないよう最善の努力を重ね，利他的な態度で生活と命を最優先する医療・福祉・公衆衛生を実現する．」「患者・生活者の身体的，心理的，社会的背景などを把握し，全人的，総合的に捉えて，質の高い医療・福祉・公衆衛生を実現する．」「地域社会から国際社会にわたる広い視野に立ち，未病・予防，治療，予後管理・看取りまで質 の高い医療・福祉・公衆衛生を担う．」ことができるよ

うになること，としている．これらを達成するための道筋はいろいろとあろうが，これらの目標全体を俯瞰して，薬の専門家としての使命感を醸成し目差すゴールやその方向を見定めるために最も有効な手段の1つが「歴史を学ぶこと」や「過去の事例を学ぶこと」であることは間違いない．

歴史を，単に過去のある時点での事象の1つとして学ぶのではなく，過去から現在への流れとして学べば，未来のあるべき姿を思い描くことができる．本書には，このような執筆者らの薬学や薬史学への想い，使命感がこもっており，薬に係わる歴史を学び，楽しむことができる薬史学の入門書として，薬系大学の学生だけでなく，教員や薬剤師にもお勧めできる一冊である．

（小林　義典）

［薬事日報社，〒101-8648 東京都千代田区神田和泉町 1-10-2，TEL. 03（3862）2141，2022 年 11 月，B5 判，150 頁，2,200 円＋税］

小形利彦 著

『明治前期地方公立医学校の洋学史的研究 ～公立医学校授業科目の検討～』

小形利彦氏による本書は，明治前期の地方公立医学校，とくにその授業内容に焦点をあてた研究の成果である．明治初期には44校ほどの公立医学校が全国各地に作られたが，明治20年を境として8校のみが医学校として存続し，残りは病院のみが残ったり廃止されたりした．小形氏はこのうち40校をとりあげ，長年研究をされてきた山形医学校に加えて，15校については順天堂大学医史学研究室所蔵の山崎文庫に含まれる規則などの同時代資料をもとに，残りの医学校については医科大学史・医師会史・地方史などの編纂資料をもとに，授業科目の概要を明らかにしている．宮城医学校（甲種）と山形医学校（乙種）の授業内容を比較してその差異を示し，山形と長野の医学校で用いられた教科書を紹介し，医制の進展と医師資格，および高等中学校医科課程設置について考察を加えている．また最後の4分の1ほどを第2部として，思い出に残る3人の人たち，工藤満寿司（ローレツに可愛がられた医師），松田りつ（山形県初の官許女性薬剤師・看護師），アルブレヒト・フォン・ローレツ（山形の近代医学の礎を築いた外国人医学教師）の事績を紹介している．

明治10年代に一時的に多くの公立医学校があったことは『医制八十年史』（1955）の資料編「第14表 医学校数」に示されているが，日本の医学史の中で注目されることは少なかった．川上武『現代日本医療史』（1965）や酒井シヅ『日本の医療史』（1982）では学校数と生徒数が多かったと簡潔に紹介されている．神谷昭典は『日本近代医学の定立』（1984）の中で明治20年の公立医学校の廃止に注目し，各年度の文部省年報のデータをもとに1876～1888年の医学校数の推移をグラフで示した．板垣英治は「石川県甲種医学校の医学教育」（日本海域研究，2009）で甲種医学校21校のリストを作成した．吉良枝郎は『明治期におけるドイツ医学の受容と普及』（2010）の中で『医制八十年史』のデータに基づいて医学校数推移のグラフを示し，東京大学医学部卒業生が全国の公立医学校に赴任して近代医学を広めたことを物語った．しかし明治初期公立医学校に焦点を当てて調査したのは，『日本医学教育史』（2012）に収載された筆者（坂井）の論考「明治初期の公立医学校」が最初である．明治6年から始まる文部省年報には，全国の学校の統計や一覧および各府県の学事年報要略が掲載されており，坂井はそこに見いだされる公立医学校を基礎として，明治4（1871）から明治20（1887）年以後に至るまで44校を同定した．そして所在地，沿革，後身，主な教員，生徒数などについて，医学校史，地方史など編纂資料を調査して報告した．そこから明らかになったのは，